

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY



広報 芝浦

Winter

2019.1

新春トップメッセージ特集号



全員一致で 全員参加

理事長

五十嵐 久也



明けましておめでとうございます。

大学中高の教員職員、校友会、後援会、関係団体の皆様におかれましては、ご家族と健やかに、新しい年をお迎えになったことと、お慶び申し上げます。

さて、この数年の間に、学校法人芝浦工業大学の社会における評価は飛躍的に向上して参りました。これもひとえに皆様方のご努力の賜と深く感謝申し上げます。皆様方は研究教育という分野でご尽力されているわけですが、本学の発展のためには、研究教育の力を一層向上させることが重要であります。したがって、この充実のために全員の力で取り組むことがなによりも大切です。「Centennial SIT Action」も全員で取り組むことによって成功します。

さらに、これらの達成のためには多種多様な手段方法が必要であります。創立100周年記念事業である本年着工予定の豊洲第二校舎の建設があります。既に建物の中の研究教育施設や機能の検討も始まっています。これも是非成功させなければなりません。大宮キャンパス、柏中高の施設計画も本年の課題であります。これらを成し遂げるためにも全員の熱意が求められます。

研究教育力の一層の向上のための、財務力向上も本年の課題であります。本学の発展繁栄に向けて理事会として取り組んで参ります。皆様方のご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。結びに、皆様のご健勝を祈念してご挨拶とさせていただきます。

世界から魅力ある 芝浦工大を目指して

学長

村上 雅人



明けましておめでとうございます。

いま世界はグローバル化に向けて急速に進展しています。例えば、ある国で起こった事件が、その国だけでは留まらず、世界中に影響を及ぼすようになってきました。われわれが愛すべき地球も、ある一国の努力だけで、その環境を維持できるわけではありません。国連が掲げている世界が持続発展するためのゴール「SDGs (Sustainable Development Goals)」も、世界各国の協調と、協力があって、はじめて成し遂げることができます。

このようなグローバル化社会において、大学が果たすべき役割はますます大きくなっています。なぜなら、教育こそが、世界を救う希望であるからです。Education is the powerful weapon to change the world. 芝浦工業大学では、今後、日本を代表するグローバル理工系大学としてだけでなく、世界からみて魅力ある大学へと発展する必要があります。

日本には、世界に誇るべき技術力と、優れた技術者教育の伝統と歴史があります。アジアを中心として、世界には日本ファンも数多くいます。今後これらを、日本の大学から世界に発信しなければなりません。

本学は、2014年に私立理工系大学で唯一文部科学省のスーパーグローバル大学に採択されました。よって、日本の私立理工系教育の先導役となることが課せられていますが、今後は、さらに進んで、世界の理工系教育の先導となることが芝浦工業大学の重要な使命と考えています。世界から優秀な研究者と学生が集い、日本のすぐれた文化と工業力を世界に伝承する大学、そんな芝浦工業大学を目指したいと考えています。

広く世界に開かれた 理工学研究科を目指して



大学院理工学研究科長
高崎 明人

明けましておめでとうございます。

理工学研究科では、大学院レベルでのグローバル化の具現化のため2016年4月に「国際理工学専攻」を開設しました。本専攻では、講義や研究指導、さらには、修士論文の作成や研究発表がすべて英語で行われ、他国の技術者・研究者と協働できるグローバル理工学人材の育成を目指しています。この春、一期生9名が修了予定です。

また理工学研究科では、グローバルに活躍できる理工学人材には専門以外にも高度な教養教育も必要と考え、副専攻科目プログラムや高度教養共通科目も展開しています。副専攻プログラムは、ビジネス開発専攻プログラムとして展開してきましたが、内容をさらに充実整備し、本年4月より技術経営副専攻プログラムとして新たにスタートします。

さらに東南アジア4ヵ国の協定校の7大学から、留学生を本学で受け入れ、在学生と共同で教育研究を実施する大学院国際共同教育プログラムも2006年より実施しています。これらの大学とは、「SEATUC (South East Asian Technical University Consortium)」を設立し、学術シンポジウムを毎年1回開催してきました。さらなる連携強化のため、13回目となる本年3月のベトナムハノイでのシンポジウムより組織を刷新し、プロシーディングの査読化や優良論文の投稿先として「SEATUC Journal of Science & Technology (仮称)」の立ち上げも行います。

本年も、広く世界に開かれた理工学研究科を目指し、改革を進めて参ります。皆様ご支援の程何卒よろしく願いいたします。



グローバル時代の 次のステージに向けて



工学部長

山田 純

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、すこやかに新春をお迎えのことと存じます。

大学を取りまく環境が目まぐるしく変化するなか、本学工学部も、本年4月に大きな変革を迎えることとなります。共通の数理科目や人文社会系科目等を担当していた共通学群が廃止され、教員は専門学科に分属し、おもに分属先の学生指導にあたることとなります。共通学群の先生から見れば、これまでのように2年生までで教育が終わるのではなく、学生が卒業するまで、場合によっては、大学院に至るまで指導することとなります。この改革の狙いは、基礎教育と専門教育の連携を深めることで、より高い教育効果をあげることです。この新しい体制で、4月から新カリキュラムをスタートさせます。これまで以上に、社会に貢献できる技術者、研究者を育成できると期待しています。

このほか、工学部では2020年度までに、日本語を理解できなくても英語だけで修了できる教育プログラムを開発する予定です。グローバル化が進む時代の要請に応えたもので、現在は、その準備を急いでいるところです。今後も、社会からの要請に応えるべく、さまざまな取り組みを行っていく予定です。本年が、次のステージに向けた始動の年となることを願っています。



さらなる国際化・学際化に 向けて邁進



システム理工学部長
渡部 英二

明けましておめでとうございます。

システム理工学部は開設 28 年となる年を迎えました。当学部では開設当初より学科間の垣根の低い分野横断型教育を指向してきましたが、昨今では分野を越えた学びの場の提供が大学に求められるようになり、時代がシステム理工学部にやっと追いついてきたと自負しています。開設当初の卒業生は、現在では社会の中堅になるところまで成長しました。

システム理工学部の改革の精神は今も途絶えることなく、さらなる高みを目指して日々発展しています。現在学部として力を注いでいるのは、大学全体のグローバル化の流れの中で、国際プログラムを完成させることです。国際プログラムは高学年での 1 セメスター以上の留学を核にカリキュラムを組み立てているもので、本年 4 月からは先行 3 学科に加えて残り 2 学科でもスタートします。国際プログラムが軌道に乗った暁には、システム理工学部を課程制に移行して、さらなる国際化・学際化に向けて邁進する所存です。

この動きを確固としたものとするためには、教員の研究活性化が必須です。さまざまなバックグラウンドを持った教員が、研究についての議論ができる雰囲気を醸成することに努めています。昨年から開始したシステム理工学部フォーラムがその一翼を担っています。システム理工学部フォーラムは今年も開催しますので、参加していただくと幸いです。



次の10年に向けた 「デザイン工学」の道を切り拓く

デザイン工学部長
古屋 繁



明けましておめでとうございます。

デザイン工学部は、昨年開設10周年を迎えました。

この10年を振り返ると、決して平坦な道ではありませんでした。

当初「デザイン工学」に対する認知度の低さもあり、就職では苦戦を強いられました。また、2017年度の学部改組では、「モノ」のデザイン（生産・プロダクトデザイン）と「コト」のデザイン（ロボティクス・情報デザイン）を柱（系）にした新しい枠組みに挑戦しました。幸い現在は、高い就職率を維持することができ、入試実績も好調に推移しています。

このほか、グローバル化への取り組みの結果、年間12件を超えるグローバルPBLを実施することができるようになり、香川大学と連携して採択された「地方と東京圏の大学生対流促進事業」では、1年目から短期交流、長期の国内留学を実現することができました。

これらすべて、教員、職員、学生が一体となりがんばってきた証であり、また、デザインと工学の融合という新たな教育・研究の枠組みが国内外に浸透し、そのトップランナーとしての地位を確立してきたと言っても過言ではありません。

本年は、10年かけて作り上げた「デザイン工学」の道を、次の10年に向けて整備するとともに、新たな道筋を開拓していく1年でなければなりません。

このような気概をもって、教職学が協働して突き進むことを新年に誓いまして、学部長の挨拶とさせていただきます。



“JAPAN QUALITY”を持つ グローバル建築人材育成へ



建築学部長
堀越 英嗣

明けましておめでとうございます。

建築学部は、今年3年目を迎えます。学部開設時に入学した一期生も3年生となり、将来を見据えた本格的な建築の専門分野を目指し始めます。先端と歴史が共存する都心の豊洲キャンパスでは、街に開かれたガラス張りの建築学部の設計演習棟である「アーキテクチャープラザ」で、生き生きと勉学に励む学生の姿を見ることができます。2019年度は、増加する建築系留学生とともに、先輩後輩の縦横のつながりを活かした国内及びグローバルワークショップや、社会で活躍する専門家の指導や講演などの多様な学びの環境をさらに活性化させていきます。

多様化し、グローバル化する社会において、建築の持つ社会的役割がますます重要度を増してきています。加速するAI社会に呼応する先端的建築のあり方が求められることはもちろんですが、近年深刻化している地球温暖化により多発する自然災害から人々を守る「シェルター」という建築の原点に立ち戻って考えることも大切です。真の哲学を持ったグローバルでサステナブルなデザイン教育や「SDGs」の視点が求められています。建築学部はこれらの課題に対応し、豊かで幸福な人々の暮らしと仕事を支える「建築のデザインと技術の融合」という、日本ならではの特性を活かした建築教育機関として、世界に貢献する“JAPAN QUALITY”を持つグローバル建築人材を育成します。



大学との連携・接続教育を生かした 理工系教育を強化



芝浦工業大学附属中学高等学校長
大坪 隆明

明けましておめでとうございます。

2017年に豊洲の新校舎に移転して2年。移転時に高校を共学化して受け入れた女子第一期生も本年4月には高校3年生となります。当初の計画通り、芝浦工業大学に高いレベルの生徒たちを送ることができる見込みです。初の高校での工学女子受け入れと高校1年時での男女別学の試みも、結果の年になります。

本校は首都圏私立中高一貫のSTEAM教育実践校として大きな注目を集め、中学・高校共に、ここ数年で大学に負けずブランド力を向上させてきました。それは志願者数や難易度の大幅な上昇に現れています。第4次産業革命やSociety5.0の中核を担うことが期待される今の中学生・高校生にとって備えるべき学力、能力とはどのようなものなのか、それらを育成するためにどのような教育の可能性があるのか、その一つの方向性を明確に受験生およびその保護者に提示できていることが評価されています。

2019年、本校は芝浦工業大学との連携・接続教育という強みを生かした理工系教育を完成させ、さらには独自のグローバル教育と言語教育をさらに強化して、芝浦工業大学の建学の理念を体現する教育を展開していきます。

また3年後の2022年には、本校の前身である東京鐵道中学開設から数えて100周年を迎えます。これまで本校にご支援をいただいた方々に感謝するとともに、誇りある100周年を迎えられるよう、さらに前進していく所存です。



考える、そして自ら「育つ」



芝浦工業大学柏中学高等学校長
野村 春路

明けましておめでとうございます。

2019年、柏中学高等学校は創立40周年を迎えます。1980年に千葉県柏市に男子校として高等学校を開校以来、1990年高等学校を共学化し、1999年には中学校を併設。この間着実に教育実践を展開し、芝浦工業大学の併設校として、千葉県を中心に首都圏で評価される学校に育って参りました。そこで本年11月には、創立40周年記念式典を挙げる予定であります。

さて、本校では「育てる」場面と「育つ」場面を切り分け、さらに自分で「育つ」場面を増やすことを基本方針に置いています。この基本方針を具体的に実践するために、本校独自の「SK学習ルーブリック」を2017年に作成しました。これは、学習面はもとより、学校行事やクラブ活動などにおいて、将来必要となるであろう6つのジェネリック・スキルをどこまで身に着けているかを生徒自身が評価できる基準表であり、これを活用することにより、生徒自らが主体的に「育つ」ことを本年も促進します。

また昨年、9年の間において、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に再認定されましたが、ベトナムの大学・高校との国際PBL、各種研究所の見学・研修、中高接続のカリキュラムなど、10年前の活動に比べ、ボリュームのある内容となっています。これらを着実に展開し、さらに探究力のある生徒の育成を加速させていきたいと思っております。

年頭あたり、これらの実践により、人工知能をはじめとした技術革新によって大きく変わっていく社会、多様なグローバル社会に放り出されても自分で歩んでいける生徒を育成することを、学校全体で取り組んでいくという決意として申し述べさせていただきます。





芝浦工業大學

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
Established 1927
Tokyo



芝浦キャンパス



大宮キャンパス



豊洲キャンパス



芝浦工業大学 附属中学高等学校



芝浦工業大学 柏中学高等学校



芝浦工業大學

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Established 1927

Tokyo